

令和5年度 第1回苫小牧市総合戦略推進会議 議事録要旨

- 【日 時】 令和5年12月21日（木）16:00～17:45
- 【場 所】 苫小牧市役所5階 第2応接室
- 【出席者】 奥村会長、菊田副会長、五十嵐委員、片石委員、工藤委員、五嶋委員
佐藤(聡)委員、柴田委員、竹田委員、中村委員、長山委員、成田委員
- 【事務局】 苫小牧市 政策推進室 茶谷室長、
政策推進課 大宮課長、吉田課長補佐、水谷主査、林川主事

議 事 次 第

- 1 開会
- 2 会長挨拶
- 3 議題
 - (1) 人口ビジョン及び総合戦略について
 - (2) 第2期総合戦略（改定版）について
 - (3) 令和4年度の取組状況について
 - (4) 新たな総合戦略の策定について
 - (5) 意見交換（自己紹介、質疑を含む）
- 4 その他
- 5 閉会

3 議題

(5) 意見交換 (質疑を含む)

<A委員>

本年度、開校した定員60名の日本語学校を運営している。特定技能を取得し、将来外食産業に就きたいという外国人を主に募集している。在留資格がある学生も入校しており、現在40名弱の生徒がいる。主にスリランカ、ネパール、バングラデシュなど、南アジアに近い出身の学生が多く在籍。彼らに進学の話を見ると、「特定技能は卒業してから5年間家族を呼べない」「そのようなビザでは働きたくない」という声が多くあり、日本語学校に入ってきて、みんな苦小牧から出ていってしまう。

多文化共生や多様性という言葉はよく耳にして我々も取り組んでいるが、せっかく苦小牧に2年間住んでくれている、みんな出ていってしまうのが現状。学生を少なくとも5年、10年といってもらうためには、苦小牧市としてどういう施策が必要なのか、特に産学官協創都市とあるが、どう絡んでいけるかということ、この総合戦略会議の中で意見できたらと思う。

<B委員>

東側の地域は、待機児童が常にたくさんいたが、今年度初めて4月時点で0歳児の希望入所者数を満たした園は1園もなかった。

仕事と子育ての両立支援の中に「小規模保育施設整備事業」とあるが、この先を考えると見直しの必要性があるのではないか。

転勤族が多いのも苦小牧の特徴。国で進めている誰でも通園制度、保育園に入っていない子どもでも預かるということに対してのリスク等も含め、保育の現場から、子供が健やかに過ごすため、子育てが親子でスムーズにできるためのまちづくりに対して意見をさせていただけたらと思う。

<C委員>

人口減少については、出産、育児の前に出会いの場を考える必要がある。

子育てに関しては、女性に負担が大きい部分がある。両親も子供も風邪を引いてしまった際、近くに両親がいない方も多々いると思うので、1週間でもお手伝いいただけるような施策を考えていただきたい。

苦小牧の賃金は他市と比べて少し低い一方、家賃が異常に高い。これからラピダス建設に伴い、大企業が南千歳のほうに建設され、恵庭や千歳に住宅地を用意するという報道がある。しかし、苦小牧においては、まだそういう部分が出ていない。ラピダスに近い植苗辺りが一番開発しやすいと思うので、住宅地として検討していただければありがたい。

<D委員>

子育て相談、赤ちゃん広場、子供食堂、訪問支援といった取組をしており、当事者の方々からリアルな声を聞いてきた。新型コロナウイルス感染症が流行していた時期、「お米がない」「来週から仕事がない」というような悲痛なご相談をたくさん受け、行政機関につないで解決するというこもやってきた。

雇用に結びつくことで経済的に安定する。子育ての切れ目からどう這い上がるかというところに、誰かが経済の手を引いていかなければならないと思う。

昨日、札幌で相談を受けたが、「何か手助けしてほしいでも、サービスがない」「就職先を探すとブラック企業しかない」「子育てをしながらはとても働けない」という悲痛な声がある。私の会社では、相手のスキルを活かして、そういう女性たちの受皿になるべく、働きやすい環境をつくりたいと考えている。

高専生は非常に注目されているが、受皿が無く、就職で東京に行ってしまうという状況が生まれている。苫小牧は工業都市であり、理工系人材に期待されている。

そのため、スタートアップ支援や女性起業の優遇されていない部分を何とか底上げしていただきたい。

<E委員>

スポーツ合宿補助事業や全国高校選抜アイスホッケー大会、ワーケーション等をきっかけに苫小牧に来た方が苫小牧のファンとなり、最終的には移住していただきたい。身近な例では、アイスホッケーを苫小牧で競技させるため、小学校の頃から母子だけで移住するというケースはたくさんある。

人口問題の最終的な目標は、出生率の増で間違いないと思うが、その前にこの議論をするときに抜けているのは、結婚組数を増やすこと。さらには、カップルを増やすことだと思う。

苫小牧市の若い職員で何か面白いアイデアを出してマッチングアプリを制作し、運営するなど、全国ニュースの特集に載るぐらいのカップルを増やす施策を実施できればいいのではないかと。

<F委員>

苫小牧の住みやすさ、環境の良さを全国に情報発信することが大切なことであると考えている。

1年ほど前にNHKのテレビ番組で、苫小牧がいかに日本有数の工業都市になったかを紹介する番組があった。その後、ラピダスやソフトバンク、テクノフレックスが来ると、矢継ぎ早に企業進出の話が決まってきている。コミュニケーションツールは増えてきているので、もっと発信したほうがよい。

10年ほど前に結婚相談所を立ち上げた。苫小牧に定住してくれた若い人たちに対して、

住宅ローンの組成時にディスカウントを与えるなど、定住促進の一助になればという形で活動を続けている。10年間で結婚した組数は70組程度と聞いている。数としては多くはないが、こういった草の根のような運動がどんどん広がっていけばよいと思う。

総合戦略については、少しでも何かお役に立てそうなスキームが出てくれば、頭をひねりながら今後も考えていきたい。

<G委員>

最近の雇用失業情勢について、苫小牧をはじめとして、管内6町も含めた数字になるが、有効求人倍率は今年度、大体1.1倍を前後している状況。

その中で、求人数、求職者数ともに減少している。求人数の減少については、物価高や賃金の上昇、新型コロナウイルス感染症からの回復を図りかねているというようなことで、求人数の出がよくないという感じを受けている。

求職者数についても、有効求職者は減少しているが、新規求職者はそれほど変わりがないという状況。これは、就職が早期に決まっていることが見てとれるが、管内の企業や新聞、マスコミの報道を見ると、人手不足というのが顕在化しているということがわかる。

高校生の就職状況について、就職希望者の割合は、北海道の他の地域と比較して就職希望者の割合は高い状況。

苫小牧については、有力な企業に就職を希望している生徒が多い状況だが、企業見学や企業説明会を事前に開催し、ミスマッチを防止していかなければならないと考えている。

<H委員>

国はデジタル田園都市国家構想を掲げた。デジタルを中心とした仕事に従事してるので、そういった側面で貢献したいと考えている。個人的には、約30年、道内自治体のSE並びに営業をしており、各自治体の課題解決をやってきた。これらの経験から得た知識を活かして何かしらの貢献ができればと考えている。

デジタルは成長産業とよく言われているが、女性活躍推進法に対する課題や離職など、リクルートのCMが非常に多い。やはり札幌圏、首都圏に人が流れていくというところに対して、会社自体も課題を持っている。民間企業としての立ち位置の中でも、何かお話しできることがあればと思っている。

<I委員>

閑散としているまちなかの課題は強く感じている。若い方々が地元で就職したいという地元愛が強ければ強いほど、まちなかの閑散とした感じは魅力を損ねていると思う。まちおこしに関わり、若い人たちの流出に少しでも寄与できればと思う。

今年の9月1日にFMラジオ局を開局した。市民、市内企業にご支援をいただいて開局しているが、苫小牧にたくさん素晴らしい方々がいるということをもっと若い方に知っ

ていただくことで、苦小牧の勢いも更に増していくと思う。

リスナーの中には道外の方も結構いるので、流入等にどのくらい寄与できるかは分からないが、道外にPRできるツールとしてもぜひ活用いただきたいと思う。

若い人たちはYoutubeで勉強するなど、様々なルートで勉強ができる世の中になってきている。起業したいという方も今後増えていくし、起業するなら苦小牧が良いという打ち出し方ができると、良い人材が苦小牧に集まるのではと考えている。

星野リゾートは、地域ならではの魅力を露出することで世界各地から人を呼び込み、人口を増やしている。企業誘致や海外層の住みやすさなど、PRで流入数を伸ばしていくのも大きな軸になる。この辺もどこかでエッセンスとして提供できれば。

<J委員>

日本の抱えている人口減少は、残念ながら自然増での追いつきはとても難しい。苦小牧市の人口を上げていくには、外部からの流入、特に大型企業の誘致が一番効果的ではないか。苦小牧に住んでいただき、そこにたくさんの従業員が家族と一緒に住んでいただき、それが苦小牧の人口を増やす、さらに、共同企業や関連企業が増え、軸が回っていくのではないかと思う。

また、どこに住むかというときに選択のキーポイントになるのは、まず教育。それから、働く場合の子育ての環境が整っているか。それと、医療。さらには、年寄りのサポートができていないか。保育士さんの環境の問題もある。いろんなことも含めて、住みやすいまちづくり、苦小牧を選んでいただけるような環境づくりを早急に進める必要がある。

<K委員>

学生たちの動向として就職の割合を見ると、機械系の8割方が道外就職になる。学生に理由を聞くと、本州の大きな会社に行くと、「自分のやりたいことができる」「多くの先輩が行っているのでそこに行きたい」など、これという理由はない状況。

ただ、最近、ラピダスやソフトバンクなど、学生も敏感で「半導体関係の仕事をやりたい」と言うようになってきているので、道外に出ていく子どもたちを苦小牧に残すチャンスが来たと思っている。

その中で、苦小牧がどれだけ魅力的なまちになるかが重要であり、脱炭素先行地域に苦勞してようやく選ばれたので、そこを活かすことができれば、若者の流出も少しは防げるようなまちになるのではと思う。

<L委員>

資料の7ページの基本目標1、地元企業と学生とのつながりを強化とあるが、学生というのは大学生を表現するものなので、「生徒・学生」としたほうが良い。

優秀な学生ほど外へ出ていってしまうことは、苦小牧の若者を定着させることにおいて

一番の課題ではないかと考える。例えば、当校には233名ほどの留学生、そして日本人を入れると300名の学生がいるが、彼らの定着率を考えると、東京に行きたいというのが多い。魅力ある企業に出会えていない点を産官学連携で何とかしたいと思っている。次年度からは、高校と大学が連携して地域創生型の教育を大学でやっていきたい。皆さんのお知恵を借りて、様々な角度から考えることで総合戦略に結びつけばと思っている。

<政策推進室長>

各分野の皆様から多岐にわたるご意見をいただき、人口減少対策は何か一つをやれば解決するというような問題ではなく、様々な施策を連携させてやらなければならないと改めて感じた。

今日いただいたご意見については、それぞれ担当部署につなぎ、すぐやれるものはすぐに取りかかる。時間をかけて検討することや予算が必要なものはしっかり検討し、新たな総合戦略に活かしていきたい。

新たな総合戦略の策定に向けて、今後何度かお集まりいただき、ご意見を頂戴することになる。今日は概要を中心にお話ししたが、「こんなアイデアがある」「言いそびれたことがある」などがあれば、随時電話、メールなどでご連絡いただきたい。